

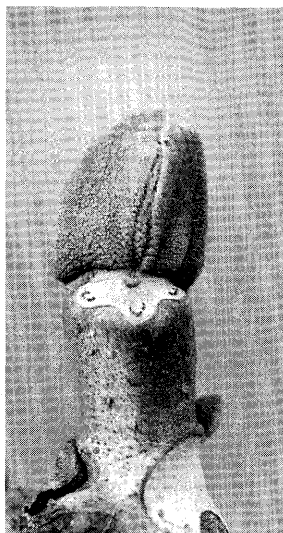
冬芽の涙

高柳 芳恵

春には新緑、秋には紅葉とその美しさがよく話題にのぼりますが、すっかり葉を落とした冬の木に興味を持つ人は少ないでしょう。

しかし、冬の木の前には、さまざまな表情をもった「顔」があることに気がついたら、木を見る眼がきつと変わるのではないのでしょうか。写真のように、それはそれは小さなヒツジやサルやコアラなどがひそんでいるのですから。

そもそもこの顔のように見える部分は、葉っぱがついていたところ（葉痕）であり、目や口に見える部分は、根から吸い上げられた水や葉でつくられた養分が行き来していたところ（維管束）です。そして、この「顔」の上に帽子をかぶったように見えるものが、木の芽の冬姿、冬芽です。人が目で見て考え口から食べて成長しているのと同じように、木も口や目を持ち、同じ役目を果たしていることを考え



▲オニブルミの冬芽



▲ゴシュユの冬芽

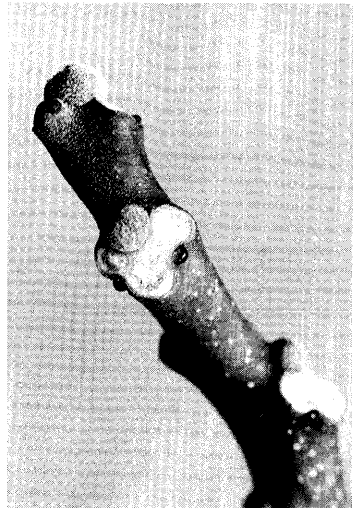


▲チャンチンの冬芽

ると面白いなあと思います。そして、「顔」の形は、木の種類によって決まっているので、顔を見れば、何の木かがすぐわかります。しかしよく見ると、同じ木でもその顔の表情は微妙に違ってきます。内気に見えたり、いたずらそうに見えたり、いじわるそうに見えたり、ふとつていたり……、おもわずふきだしてしまいます。

私は、冬の間いろいろな「顔」探しをし、春が近くなると冬芽がふくらんでかわいい葉や花があらわれる様子を見るのを愉しみにしています。

ある年の三月初旬のことでした。数本の小枝をコップにさして窓辺に置いておいたのですが、日の光を受けてキラリと輝いているのに気がつきました。不思議に思っ近づいてみると、それはセンダンという木の小枝についた小さな二つの水滴でした。水滴は、葉痕のわきのくぼんだところについて



▲センダンの葉痕のくぼみからでてきた“なみだ”

いて、ベレー帽をかぶった子猿が涙を浮かべているように見えるではありませんか？ 思わぬ発見に見とれていた私ですが、なぜそこに水滴が付いているのか不思議でした。

「昨日見たときは、なかった。偶然ついたとは考えられないなあ」

次の日も、また次の日も水滴はついたままでした。数日後、センダンの小枝についていた六個の冬

芽すべてに、涙を浮かべる子猿がいました。

「この涙は、コップから吸い上げられた水が、勢い余ってしみだしてきたんだ！」

私はこの時、前の年の三月にミズキという大木の木肌に耳をくつつけ、木の内部を上がっていく水の音を聞いたことを思い出しました。「コボコボ、シャー」という音をたて、大量の水が根からすいあげられていく様子が想像できたのです。そして、枝先の細い枝を手折ると、ポトツ、ポトツとその水があふれてきました。木から外側を見ると、まだ何の変化もあらわれていないように見える早春、すでに木の内部では、エネルギーがみなぎりはじめていることを実感した出来事でした。

二十センチもないセンダンのその小枝は、その後コップのなかで、冬芽をふくらませ、ついにかわいい葉っぱと花のつぼみを出しました。

ところで、センダンという木は、別名 棟（アフチ）ともいい、薄紫色の小さな花を房状にたくさんつけます。初夏に咲く花として、童謡「夏は来ぬ」（佐々木信綱作）の歌詞の四番にでてきます。

一 うの花のおう垣根に

時鳥（ホトトギス） 早もきなきて

忍音もらす 夏は来ぬ

四 棟（アフチ）散る川辺の宿に

門遠く 水鶏（クイナ）声して

夕月涼しき 夏は来ぬ

「夏は来ぬ」は、五番までありますが、初夏の田園風景を見事に表現しています。うの花（ウツギ）、ホトトギス、早乙女、水鶏（クイナ）、ホタル、五月闇……。

田舎で子ども時代を過ごした私には懐かしい風景



▲センダンの葉と花のつぼみがでてきたところ

です。しかし、一つ一つ姿を消していき、今ではそんな風景を目にすることがなくなってきました。センダンが流した涙、本当は何か言いたかったのではないのでしょうか。

（ナチュラリスト）